



新毎日

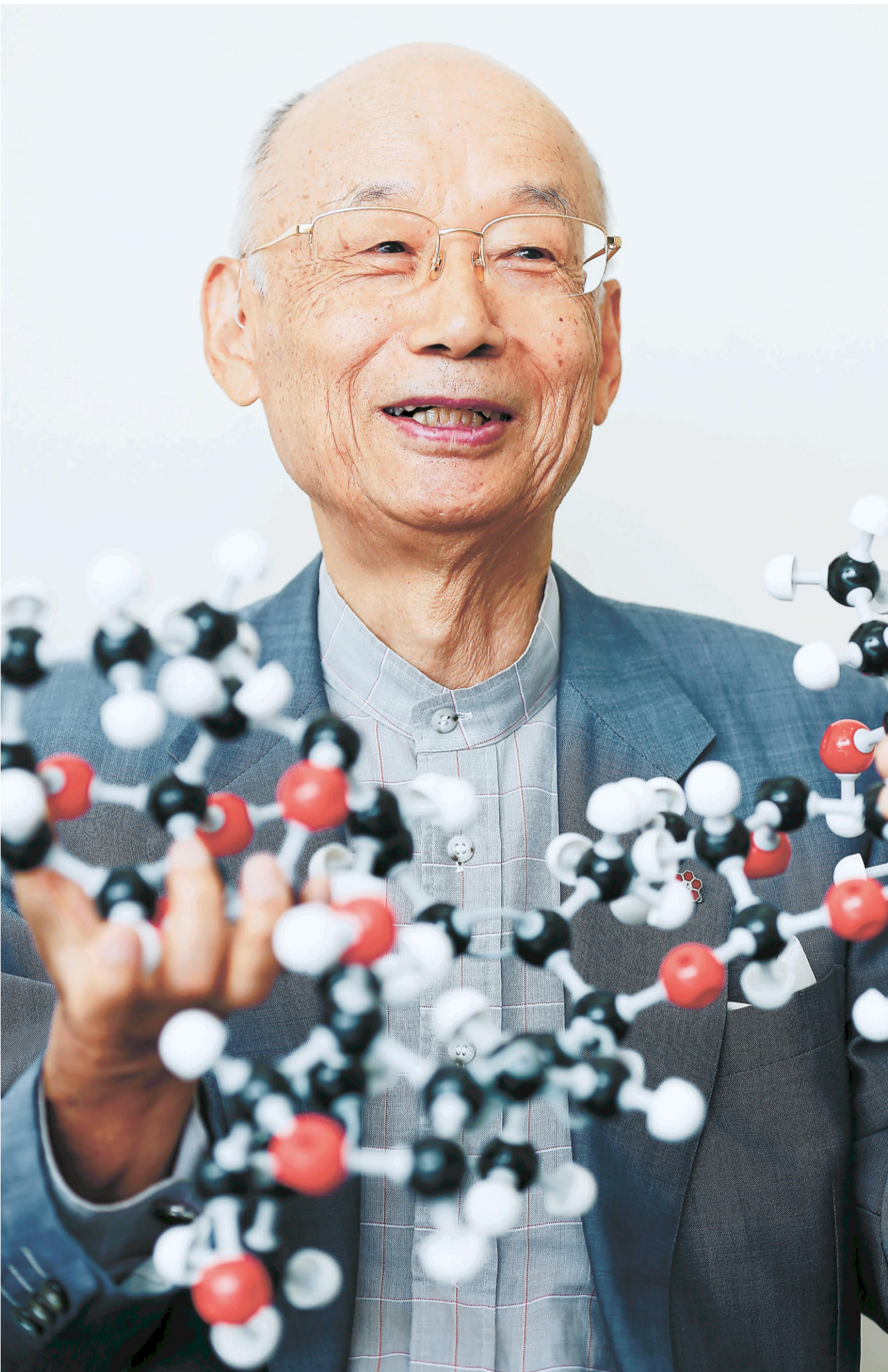
10月5日(月)
2015年(平成27年)

発行所：東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-8051 電話(03)3212-0321
毎日新聞東京本社

号外

感染症特效薬に貢献

大村智氏ノーベル賞



ノーベル医学生理学賞が決まった大村智・北里大特別栄誉教授。小出洋平撮影

医学生理学賞3人目

スウェーデンのカロリンスカ研究所は5日、2015年のノーベル医学生理学賞を、大村智北里大特別栄誉教授(80)ら3人に授与すると発表した。大村氏は土壤中の微生物が作り出す化学物質から有用なものを見つける研究を続け、1979年に寄生虫に効果のある「エバームекチン」の発見を発表。この物質から、熱帯地方で流行する感染症の特效薬や、家畜やペットの寄生虫治療薬が作られた。これまで発見した480種類以上の化学物質から26種の医薬品や農薬が生まれ、天然物有機化学分野の多大な業績が評価された。

日本人の受賞は昨年の赤崎勇・名城大終身教授、天野浩・名古屋大教授、中村修二・米カリフォルニア大サンタバーバラ校教授の3氏に続く快挙で、医学生理学賞は利根川進・米マサチューセッツ工科大教授(1987年)、山中伸弥・京大教授(12年)に続き3人目。日本の受賞者数は、米国籍の南部陽一郎氏(08年物理学賞、中村氏を含め23人(医学生理学賞3、物理学賞10、化学賞7、文学賞2、平和賞1)となる。授賞式は12

月10日にストックホルムで開かれ、3人には賞金800万スウェーデン圀(約1億1500万円)が贈られる。

土壌1gの中には、約1億匹の微生物がいるとされる。大村氏は70年代から各地で土を採取して微生物を分離・培養し、その微生物が出す化学物質に有用なものがないか調べていた。

エバームекチンは、そのうちの一種。静岡県伊東市のゴルフ場周辺の土中にいた新種の放線菌が、寄生虫駆除に効果がある成分を出していることを突き止め「エバームекチン」と命名した。さらに米製薬大手のメルク社との共同研究で、構造を一部変えた駆除薬「イベルメクチン」を開発。わずかな量で家畜のさまざまな感染症や犬のフィラリアに劇的に効き、世界で最も使われる動物薬の一つになった。

さらにエバームекチンはヒトにも効果があることが分かり、蚊やブヨが媒介する熱帯地方特有の病氣「オンコセルカ症(河川盲目症)」や「リンパ系フィラリア症(象皮病)」、ダニが原因の皮膚病「疥癬」などの特效薬として普及した。

リンパ系フィラリア症も含め、イベルメクチンの服用で感染の危機から救われた人は約3億人に上るといふ。

購読お申し込み

毎日新聞のニュースサイト
<http://mainichi.jp/>

専用フリーダイヤル 0120-468012

ヨムハマイニチ